

「ロゴスの場としての大学」へのロゴスの実践

——三木清の大学論——

藤 本 夕 衣

要旨 三木清（一八九七―一九四五）は、戦前の哲学者、論壇人として名高い。京都学派の一人として知られる三木の哲学については既に多くの研究の蓄積がある。しかし、三木が主に一九三〇年代に大学論を多く書いていたことはあまり知られておらず、研究の俎上にもほとんど載せられてこなかった。三木の主張する大学の理念は、大枠で言えば「近代の大学の理念」を踏まえたものであり、既にその理念が揺らいでいる現代から見ると、余りに素朴な大学論であるようにみえる。しかし、彼の大学論の背後にある時代状況や根底にある哲学的課題をみることで、現代と同じ「危機」に直面していたことが分かる。本論では、まず、三木がその人生において「大学」という場をどのように経験したのか、ということ考察する。そのうえで、一九三〇年代の大学論がどのような危機に面して展開されたのかを考察する。最後に、その大学論の根底にある哲学的課題との結びつきを明らかにする。こうした考察を経ることで、三木が「ロゴスの場」として大学を捉えていたこと、さらに彼の大学論は、パトスに突き動かされる時代にあつて、「ロゴスの場としての大学」を保つためのロゴスの実践として捉えられることができる。キーワード…大学、三木清、ロゴス

一、危機の時代における大学論

三木は、戦前に活躍した哲学者、論客として知られている。京都学派の西田幾多郎の教え子の一人としても名高い。岩波茂雄の支援を受けてドイツに留学し、留学先ではハイデガーに師事している。帰国後は、関東に移り、岩波書店の運営に関わりながら、岩波文庫や岩波講座シリーズの創設に携わり、ジャーナリスティックな場で執筆を重ねた。

三木の大学論は、ジャーナリスティックな場で主に一九三〇年代に書かれている。大学論と一括りにしても、その扱うテーマは多彩である。もっとも知られているのが「教養」に関する文章であり、これは現在でも、教養主義についての歴史研究においてしばしば言及されている⁽¹⁾。しかし、学問や研究など大学全般についての論考については、これまでほとんど研究対象にされてこなかった。そうしたなか、近年、大澤聡によって三木の大学論を集めた論集『三木清大学論集』が編纂された。大澤は、この編纂の意図について「三木清の言葉を何度でも蘇生させ、課題解決のヒント」を現代に与えることにしよう⁽²⁾。

三木の大学論が現代においても同時代的な問題を考える手がかりに出来るのは、彼の大学論が、いわゆる「近代の大学の理念」を踏まえながらも、その理念が危機に直面するなかで展開されているからであると考えられる。三木の大学論の概要をまとめると次のように説明できる⁽³⁾。

大学は、学問の場である。学問の場であるということは、客観的な認識に立ち、真理を探究する場である。そうした学問の立場に立つことによって大学は国家の発展に寄与する。それゆえ国家は、大学における研究の自由を守るべきであり、時の「政策」に基づいてその研究の自由を阻害してはならない。時々の政府による「政策」と、より長期的な国家を導く策としての「国策」は異なる。大学の学問はたとえ時の政府の「政策」に反したとしても、

より長期的な国家の利益となるもの、すなわち「国策」に寄与するものである。それゆえ研究の自由は、単に教員や学生といった大学人の個々の思想の自由のために守られるべきものではなく、国家のためにこそ守られるべきものなのだろう。

こうした国家との関係を踏まえて、大学の担うべき学問の役割について、三木は同時代の問題から遊離するような学問、すなわち概念や理論の遊戯のような「超然主義的な学問」を批判する。しかしかといって、同時代の問題に即して政策を提唱するような学問を擁護するわけではない。前述したように、大学は政府の政策を立てる機関ではないと考えるため、学問が時流に追従することも批判するのである。このように、超然主義に対しても、時流への追従に対しても批判的な見解を示す三木は、大学の權威が、知的ないし理論的関心に基いたものである必要を説き、それを「真の冷静」と呼んでいる。

こうした近代の大学の理念を下敷きにして展開される三木の大学論は、近代の大学の理念が揺らいでいる現代にあつて、あまりに理想主義的である、あるいは、あまりに素朴な大学論であるという印象を受ける。しかし、三木がこうした理念をどのような経験や時代状況のなかで主張したのか、その背後にどのような哲学的な思索があつたのか、ということを見ていくと、現代にあつてもなお、彼の大学論の言葉が「課題解決のヒント」として立ち上がってくる。というのも、三木が大学論を展開した一九三〇年代は、ドイツの大学が危機に直面していた時期にあたるからである。すなわち、「近代の大学」の理念を構築したドイツにおいて、ナチズムの台頭とともに、その大学の理念が揺らいだ時期に展開されたということである。三木の大学論の多くは、そのような同時代の大学の危機を踏まえたうえで執筆されている。

本稿では、三木がどのような時代において、一見素朴ともみえる大学の理念を主張したのかをみるために、大学論に関する初期の論考を考察する。

二、「大学論」以前の大学経験

一九三〇年代に執筆された三木の大学論が、どのような背景から展開されたのかを理解するために、まず、三木自身が、どのように「大学」という場に関わってきたのか、その人生のどのような局面において大学論が執筆されたのかについて整理する。

(一)「教養」の影響——一高から京都帝国大学へ

三木は、一九一七年、京都帝国大学に入学した。大学進学前には一高で学び「教養」の理念の影響を強く受けた。大正時代の「教養」は、「陶冶」とも訳されるドイツ語の「ビルドゥング (Bildung)」を核に形作られた理念であり、古典の読解を通じた人格形成を意味した。阿部次郎の『三太郎の日記』や倉田百三の『出家とその弟子』、そして西田幾多郎の『善の研究』は、大正期の青年層に広く読まれたことで知られ、しばしば当時の「教養」を象徴する書物として取り上げられる⁽⁴⁾。三木は、一高時代に自身が影響を受けた「教養」について次のように述べている。

あの第一次世界戦争という大事件に会いながら、私たちは政治に対しても全く無関心であった。あるいは無関心であることができた。やがて私どもを支配したのはかえってあの「教養」という思想である。そしてそれは政治というものを軽蔑して文化を重んじるという、反政治的ないし非政治的傾向をもっていた、それは文化主義的な考え方のものであった。あの「教養」という思想は文学的・哲学的であった。それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいうものは「文化」には属しないで「文明」に属するものと見られて軽んじられた。言い換えると、大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想——福沢諭吉などによって代表

されている——に対する反動として起ったものである⁽⁵⁾。

「教養」は、哲学や文学の読書を重視し、個人の内面の成長に重きをおく理念であった。そして、そのために政治に関する事柄を二次的な問題とした。三木自身、一高時代には、このように政治的な事柄への関心をもたない「教養」の世界に生き、その後、哲学を学ぶ場、すなわち「反政治的ないし非政治的」な場を求め大学に進学したのである。

こうした当事者としての三木の教養についての叙述は、当時の教養の理念がいかなるものであったのかを知る重要な手がかりの一つとされている⁽⁶⁾。同時代の社会の在り方や政治に無関心で、自己の内面の問題に拘泥し古典を読みふける。観想的な生活に偏って、実践的な問題に無関心であることを正当化した理念であった。そのため、当時の「教養」は、その後、マルクス主義者などから批判された。三木自身も「政治的教養」の必要性を説き、一見すると観想的な教養の自己批判を行っているようにも理解できる⁽⁷⁾。

しかしながら、三木は、非政治的であったことを批判しながらも、必ずしも、古典を読むこと自体を否定したわけではなかった。「教養」の長所について次のように述べている。

私はその教養思想が擡頭してきた時代に高等学校を経過したのであるが、それは非政治的で現実の問題に対して関心をもたなかっただけ、それだけ多く古典というものを重んじるという長所をもっていた⁽⁸⁾。

三木の教養批判について言及する場合、この右の記述については、まず言及されない。もっぱら、当時の「教養」について非政治的であったと指摘する部分のみが採りあげられ、彼が、同時に、古典を重んじることを「長所」と

みなしていたことは注意されてこなかったのである。しかし、三木の大学論を理解するためには、彼が、「教養」を非政治的であるとみなしながらも、古典を読むことを「教養」の「長所」と考えていたということは見逃すことのできない点である。

（二）『哲学』の影響——西田幾多郎、そしてハイデガーとの出会い

三木は、一高時代に「教養」の理念の影響を受け、読書を重ねるなかで、特に西田幾多郎の『善の研究』に強く感化された。当時、一高から京都帝国大学に進学するのは極めて異例であったが、三木は、西田のもとで学ぶために京都帝国大学への進学を選んだ。

もちろん、京都において影響を受けたのは西田だけではない。ドイツのビルドゥングの理念を日本に伝えたことで知られるラファエロ・フォン・ケーベルの弟子、波多野精一からもまた、三木は深い影響を受けた。波多野は、ケーベルのもとで近世哲学を学び、ベルリン大学やハイデンベルク大学に留学し、カントの翻訳も手掛けた。三木は、波多野から古代ギリシアの哲学とキリスト教を学ぶことの重要性を教えられ、ギリシア語を学び、波多野の紹介でドイツの大学に留学している。一九二二年から二年間、三木は、ハイデンベルクとマールブルクの大学で学んだ。

ドイツでは、その後、彼が大学論を展開するうえで重要な出来事があった。それは、ハイデガーとの出会いである。波多野の勧めでギリシア語やギリシア哲学を学んでいた三木は、当時、アリストテレス研究者として知られていたハイデガーのもとで学ぼうと、ハイデンベルク大学からマールブルク大学へ移ったのである。

三木がハイデガーの講義を受講したときは、ハイデガーの初期の名著『存在と時間』が刊行される直前であった。すなわち、ハイデガーが『存在と時間』をまとめる最中の思索に三木は立ち会ったということになる。三木は、と

くにハイデガーの「歴史哲学としての解釈学」の方法の影響を受けたと先行研究において指摘されている⁽⁹⁾。三木は、ドイツ滞在後、フランスに移りパスカル論に取り組むことになるが、このパスカル論の考察の方法にもまたハイデガーの解釈学の影響が指摘されているのである⁽¹⁰⁾。

大学論を考察するうえで重要になるのは、こうした学問上の影響だけでなく、西欧の学問の伝統にふれた経験そのものでもあると言える。「読書遍歴」に記されているように、三木は留学中、アリストテレスをはじめニーチェやキルケゴールなど西欧哲学の著作を読み込み、ハイデガーの思索の現場に立ち会った。そうした中でドイツの大学に息づく「アカデミズムの伝統」を肌身をもって体験したと言えよう。その体験があったからこそ、三木は、次のように日本の大学欠点について指摘することができたと考えられる。

我が国の大学の欠点は寧ろ十分にアカデミックにないところにあるといい得るであろう。……我が国においてはアカデミズムの欲するような古典の継承ということが十分に行われていない。古典を継ぎ、古典によって養われるということがアカデミズムの重要な意義である。……しかるに今日の我が国の大学の学問の欠点は、あまりに抽象的理論的であるということにあるのではなく、反対にあまりに抽象的理論的でないということにある。日本ほど純粋な理論家に乏しい国はないであろう。……理論が理論として有する意味の重要性が理解されないところでは真のアカデミズムは発達し得ないであろう⁽¹¹⁾。

当時、大正期の「教養」が同時代の社会や政治に関する問題に無関心な態度を助長していたため、観想的な理論的知に拘泥することが批判されていた。つまり、抽象的、理論的であるという点において大学は批判されていたのである。そうした批判が勢いを得ているなかで、「日本ほど純粋な理論家に乏しい国はない」と三木が指摘できた

のは、彼がドイツの大学でアカデミズムの伝統に触れ、外から日本の大学をみる視座を得ていたからであると考えられる。

このようにドイツへの留学の経験を通して、三木は、日本の大学の問題を巨視的に捉え、同時代の大学批判とは一線を画す批判的な視座を得たと言えよう。ドイツへの留学は、その後、大学論を展開していくうえでの三木の大学観、学問観の根底を形作ったと考えられる。

(三) ジャーナリズムでの執筆——大学から在野へ

帰国後は、第三高等学校で講師として働きつつ、京都帝国大学の教授職に就く機会をうかがっていた。しかし、その希望はかなわず、東京にうつり、一九二七年から法政大学の教授職についた。法政大学に籍をおきながら、三木は、岩波書店の編集の仕事も担い、「人間学のマルクスの形態」といった論考を『思想』に発表するなど、マルクス主義の哲学的考察の可能性を開いた。その後、日本共産党に資金提供をしたという嫌疑から拘留され、一九三〇年に法政大学も辞した。

三木が大学論に取り組んだのは、ちょうど大学を離れ、ジャーナリズムでの執筆機会を増やした時期にあたる。拘留所から釈放された直後には、自宅にこもり、『歴史哲学』を中心にした哲学的な著作を執筆した。その間、時事問題についての短い論考を次々と発表している。そうした論考で扱われたテーマの一つが大学論であった。したがって、大学論を考察する前に、当時、三木が取り組んでいた哲学研究上の課題を理解する必要がある。

三木は『歴史哲学』の後に『構想力の論理』を執筆しているが、その両著作の間における自身の課題について、『構想力の論理 第一』の序文にて次のように述べている。

前著『歴史哲学』の発表（一九三二年）の後、絶えず私の脳裏を往来したのは、客観的なものと主観的なもの、合理的なものと非合理的なもの、知的なものと感情的なものを如何にして結合し得るかという問題であった。当時私はこの問題をロゴスとパトスとの統一の問題として定式化し、すべての歴史的なものにおいてロゴスの要素とパトスの要素を分析し、その弁証法的統一を論じることが私の主なる仕事であった。

「ロゴス」とは、ギリシア哲学以来の哲学用語で、言葉を意味し、人間の理性的な側面を捉える概念である。それに対して「パトス」は、人間の感情的な側面を捉える概念であり、三木は「激情、情緒、情熱」と訳している⁽¹²⁾。この二つの異なる側面を、いかに「結合」あるいは「統一」するのかということが、三木の哲学上の課題であった。ドイツ哲学研究者である大峯顕は、三木の『構想力の論理』の解説の中で「著者の哲学的精神の中では、あくまで明晰さを求めるロゴスの意識と主体性の暗い深淵へと向うパトスの意識という対立する二つのものがいとも共存していたわけである」と指摘している⁽¹³⁾。こうした哲学上の課題は、時事的な事柄を論じるときにも根底にあったと考えられる。実際、後にもするように、三木の大学論においても、このロゴスとパトスの統一という課題は通底するテーマとなっている。

三、大学に迫る危機に抗して

（一）滝川事件における「研究の自由」

次に、一九三三年に執筆された初期の大学論に関する論考を手掛かりにして、三木の大学論の背景にある問題意識を考察する。

三木が最初に大学の問題についてまとめた形で言及したのは、一九三三年七月の「京大事件の再吟味」である。

「京大事件」とは、一九三三年四月に京都大学法学部の滝川幸辰教授をめぐって生じた事件、いわゆる滝川事件のことである。滝川が一九三二年十月に中央大学で行った講演の内容が、「国家思想ノ涵養」を義務付けた大学令第一条に違反する「危険思想」とみなされたのである。その疑義から滝川の著作は発禁処分とされた。その後、文部省が京大総長にたいし滝川の処分を命じ、五月に滝川が休職処分とされた。この文部省の要請が大学の自治を脅かす問題であるとして、教授会の抵抗や学生運動などが起こった⁽¹⁴⁾。

滝川事件は、このように大学の自治権をめぐる問題であり、一教授の処分を文部省が要求するのは越権行為である、すなわち文部省の手続き上の問題であるとみることもできる。しかし、三木は「もちろん手続きの問題も決して重要でなくはないにしても、問題の根本はどこまでも滝川教授の思想である」と指摘した⁽¹⁵⁾。というのも、そもそも手続き以前の問題として、文部省の指摘するように滝川が「危険思想」であるかどうか不明瞭であるからだ。何が「危険思想」であって何がそうでないのか、ということは主観的かつ相対的な事柄であり、そのような「甚だ曖昧な意味の語」のみで滝川を判断することはできないと指摘した。三木は、滝川が「大学において到底許しがたきものであるかどうか」を明らかにする必要がある、そのためには専門家と教授会の意見を第一に尊重すべきであると言う。

このように、三木は、文部省側が「危険思想」という曖昧な言葉をもって滝川を捉えること自体をまず批判する。三木がこの点にこだわるのは、「研究の自由」こそが、大学の根幹となる精神だとみるからである。滝川が「危険思想」であるかどうかという問題は、あくまでそれが「大学における研究の自由の範囲を越えるかどうか」という基準で考えられるべきであり、その判断は専門家や教授会によってなされるべきである。つまり、大学の研究の自由を守るため大学の自治が擁護されなければならないということである。何が「研究の自由」の範囲内に認められ、何が認められないのかを、専門家や教授会が判断するという原則がなければ「研究の自由は現実的には保証されて

いない」ことになる、と三木は言うのである。

こうした三木の批判は、文部省だけでなく、京大法学部以外の教授会に対しても向けられた。三木は、他大学の教授会が、組織として「研究の自由」についての見解を表明していないことを問題視した。というのも、当時、事件に対して京大の外からも様々な批判や反撥があったものの、それらはあくまで個人的な意見表明に留まっていたからである。京大内部においてすら、法学部以外の学部の教授会は消極的な態度をとった。滝川事件について詳細を考察している松尾尊兌は、同じ立場にあつて協同してきたはずの東大法学部の教授会でさえ公式の声明を出さなかったことについて、文部省の矛先が自分たちに向けられ「飛火」することへの警戒があつたからだと指摘する⁽¹⁶⁾。多くの大学は「自分たちの保身で精一杯」であり、滝川の処分を有効としうえで大学の自治を尊重するように求める、という姿勢であつた。

しかし、三木は他学部や他大学が組織として事件への見解を表明しないことを、仕方のない保身とはみない。なぜなら、組織として滝川事件に対する立場を表明しなければ、文部省による「研究の自由」のはく奪を黙認することになる、とみるからである。黙認すれば、同様の事件が他大学で生じた場合に、いくらその教授会が抵抗したとしても説得力を持ち得ない、と言う。三木の見解に従えば、滝川処分を有効とみなしたうえで、大学の自治を尊重することを求めるのは矛盾したことになる。あくまで滝川処分に抵抗しなければ、大学の自治を擁護することはできない、ということになる。

このように、三木は大学の根幹にある理念として「研究の自由」を徹底的に擁護する。注意すべきは、単に〈文部省が研究の自由をはく奪した〉といった大学外部からの圧力のみを問題にしているのではないという点である。三木は、文科省の圧力を黙認し、「研究の自由」を擁護することができずにいる大学内部をも批判している、ということがある。

(二)「ナチズムの文化弾圧」への抵抗

三木が、このように滝川事件に抵抗し、「研究の自由」を徹底して擁護しようとした背景には、この問題が日本国内のみに留まらない広がりをもっていたという事情がある。というのも、滝川事件と同時期、ドイツではナチスによって「非ドイツ的」とみなされた何万もの本が燃やされた焚書事件があり、思想の自由への危機が世界的な問題として注視されていたからである⁽¹⁷⁾。この事件については、「世界の名著も哀れ一片の煙」(読売新聞、一九三三年五月十二日)や「マルクスや性の書物、大群衆の前で火葬」(朝日新聞、一九三三年五月一二日)といった見出しの記事が掲載され、日本でも大きく報道された。

三木は、事件後まもなく「ナチスの文化弾圧」(一九三三年五月)を著わし批判している⁽¹⁸⁾。そのなかで、ナチス政権が、ユダヤ人や自由主義、平和主義、マルクス主義に関わる学者を大学から締め出していることを例に挙げ、「前代未聞の文化弾圧」であると言う。特に「非ドイツ的」という理由で、思想が締め出される現状にたいして、何がドイツ的であり何が非ドイツ的であるのか、と問い、その概念の曖昧さを問題視している。その結論部では次のように述べている。

およそ文化を愛する者は、この文化時代において、ナチスの野蛮な、無意味な、恥づべき文化の弾圧を黙視し得ないであろう。日本の文芸家、思想家たちがこのとき起こって、ナチスに抗議すると共に世界の世論に訴えようとする計画があるのは、まことに理由あることである⁽¹⁹⁾。

ここで言及されている「世界の世論に訴えようとする計画」とは、論壇文壇の著名人が集結してナチスに抗議文を送ったことを指していると考えられる。新聞記事を確認すると、焚書報道の二日後に「わが文論壇人からナチス

に抗義 焚書は『文化の破壊』という見出しの記事が掲載され、論壇文壇の人々が「文化擁護運動」をおこすために結集し、ナチスの焚書事件への抗議書をヒトラーに発送することを決めたと伝えている。その発起人として、長谷川如是閑、川端康成、谷川徹三、新居格各氏とともに、三木の名も挙げられている。

注目すべきは、五月十四日の記事に「ナチスの文化破壊に対する反動の第一弾が欧米諸国を尻目にかけて我が国において結成されたことは奇現象」と書かれていることである。焚書事件の五月十日からたった四日で遠く離れた日本にこうした動きが生じたのは、たしかに「奇現象」である。松尾は、「この組織結成に際しては、ナチス焚書事件が契機となったことが従来強調されているが、実は滝川事件そのものもそれと並ぶ重要な要因となっている」と、当初から滝川事件も結成の契機になっていたことを指摘する⁽²⁰⁾。実際、滝川事件は、四月中旬には文部省の滝川休職要求が報道されており、この焚書事件へ論壇と文壇の対応の記事と同誌面にも、「文部省が直接瀧川教授休職か」という題の記事が掲載されている。つまり、滝川事件の渦中にあつて危機意識を高め、抵抗運動の準備を進めていたなかに、ナチスの焚書事件が生じ、滝川事件への抵抗を表には出さず「思想の自由」の危機に抵抗しようという動きがあったと考えられるのである。この論壇と文壇の著名人による焚書事件への抵抗の運動は、その後、作家、評論家、演劇人など多分野にわたる知識人を集め、一九三三年七月に「学芸自由同盟」の結成へと至るが、三木もこの結成に関わっている。

以上の動向をみると、滝川事件と焚書事件は、いずれも研究の自由や思想の自由の危機を表しており、抵抗すべき問題であると広くみなされていたことが分かる。そうした時代状況のなかで、三木も、それぞれの事件について個別に批判を加えたということである。先に見たように、滝川事件にたいしては「危険思想」という概念の曖昧さを指摘していたが、ナチズムの焚書事件に対しても、「非ドイツ的」といった曖昧な概念をもって思想弾圧を行う点を批判している。「ナチスの文化弾圧」の冒頭では、『ドイツ的』とは何か。『非ドイツ的』とは何か。この問を

冷静に提起することは、それだけで既にナチスの国粹主義的文化政策に対する批判の意味を含み得るだろう」と述べる。具体的には、ドイツ文化の代表的人物として誰もが認めるゲーテを挙げ、彼がユダヤ人哲学者であったスピノザの「紛れもない崇拜者」であったと自称していることを指摘する。そのうえで「一つの文化は他の文化と接触することによって発展し、開花する。非ドイツ的文化の影響のもとにドイツ的文化も生育し得たのである」と正論を述べるのである⁽²¹⁾。このように「非ドイツ的」という枠組みが如何に曖昧で空虚なものを明らかにしながら、そうした概念を用いて文化弾圧を行うナチズムを批判した。

以上みてきたように、大学に関わる三木の初期の論考は、国家による文化弾圧、研究や思想の自由への侵害の危機が迫るなかで展開された。さらに、先に見たように、当時、三木は哲学上の課題と時事問題を往還しながら執筆しており、これらの問題もまた三木にとって単なる時事的な事件に留まるものではなかった。次に、三木の取り組んだ哲学上の課題が大学論にどう関わっているのかについて、同時期のハイデガー批判を手掛かりにしながら考察を進める。

(三) ハイデガーの「学長就任演説」と「ロゴス」の回復

滝川事件、焚書事件と同年の十一月に書かれた「ハイデッガーと哲学の運命」は、ハイデガーの哲学に焦点をあてつつ大学の在り方を問う論考である⁽²²⁾。ここでは、ハイデガーの「ドイツ大学の自己主張(以下、学長就任演説)」が採りあげられ批判的に考察されている⁽²³⁾。この学長就任演説は、一九三三年五月に、ハイデガーがフライブルク大学の学長に就任したときの演説である。このなかでハイデガーは、ドイツの大学がドイツの民族に根差し、その精神的な導きとなるべきだと主張した。具体的には、たとえば学生の責務として、勤労と国防と知的奉仕の三つを挙げるなどし、学問こそがドイツ民族の命運を統率し庇護するものを育成し陶冶する、と主張した⁽²⁴⁾。

ハイデガーは学長就任演説の直前にナチスに入党していた。そのため、この演説は、彼のナチズム傾倒を象徴するものとみなされ、ハイデガー研究だけでなく大学論においても批判的に考察されてきた²⁵⁾。ハイデガーのナチズムへの傾倒は、その哲学的な思索とは関係のない一時的なことであつたとハイデガーを擁護する論者がいる一方で、その哲学に深く根差す問題として批判する議論もある²⁶⁾。

三木は、ハイデガー自身の思想に深く根差した問題が表れているという立場から批判した。彼がハイデガーの元で学び、その思想の影響を深く受けたことをもつてみれば、焚書事件のような文化弾圧を行うナチスにハイデガーが入党し、ナチズムに共鳴する考えを演説したという事実は、少なからぬ衝撃を与えたと推測される。ただ、ここでも三木は、冷静に、ハイデガーの哲学上の問題の分析を試みている。

三木が指摘するハイデガーの問題は、端的にいえば「ロゴス」の軽視である。三木は、ハイデガーの学長就任演説が「血と地と運命とに、凡てパトスの的なものに求める」思想であるという点に根底的な問題を見出す。よつて結論部分では「ロゴスの力を、理性の権利を回復せよ」と主張した。もつとも、この演説の前にも、三木はハイデガーの思想がパトスに傾いていると指摘しており、ハイデガーの演説のみをもって「凡てパトスの的なものに求める」思想を問題にしたわけではない²⁷⁾。あくまで、ハイデガーの思想の根底にある課題が表面化したこととしてこの演説を解釈したと考えられるのである。

三木が、ハイデガーの思想のうちに「パトス」の問題を捉えているように、ここでは「ロゴスとパトスの統一」という自身の哲学的な課題が踏まえられている。この課題に即して三木の大学観を捉え直せば、三木が、国家との関係において大学を「ロゴスの場」と見なしていたと捉えることができる。「理論を理論として追求する学問」の「真の冷静」を説いた三木にとって、国家が「民族」といった言葉でパトスに訴える時代であればこそ、いっそう大学が「ロゴスの場」として保たれることの重要性は増す。そう考える三木にとって、ハイデガーの学長就任演説は、

ナチズムが台頭するなかロゴスの場であるべき大学を、パトスに明け渡す宣言であったと理解されたと考えられる。もちろん、ロゴスの場として大学を重視するからといって、三木がパトスを排除して考えていたわけではない。「ロゴスとパトスの統一」という課題からも明らかのように、純粋なロゴスの場として大学が考えられていたわけではないだろう。同時代の社会のパトスに根差しながらも、ロゴスを求める思索こそが求められていたと考えられる。

先に見たように、滝川事件と焚書事件は、ともに研究の自由や思想の自由を脅かす問題であった。大学において研究の自由が守られるべきなのは、同時代の国家の利害から離れて、ロゴスをロゴスとして探究する場としての大学を守るためであると言い換えることができる。すなわち、研究の自由は、学問が「真の冷静」を保つための条件であり、大学が「ロゴスの場」としてあるための条件でもあると言える。したがって、三木は、滝川事件や焚書事件いずれも、ロゴスの場としてあるべき大学が、その条件を失う危機に直面しているとみて批判したのだと考えられる。

さらに、外部の圧力だけでなく、大学内部において「研究の自由」を擁護できずにいる状況にも、三木の批判は及んでいた。滝川事件を黙認する諸大学の教授会も、大学の学長としてパトスを強調したハイデガーも、どちらも「研究の自由」の意義をかたることができずにいた。これは言い換えれば、外部からの政治的圧力に対して「研究の自由」を擁護する、その自由の意義をかたるための「ロゴス」を大学人自身が失っている、と捉えることができるだろう。このことは、外圧からのロゴスの喪失の危機とは異なる、もう一つの危機とみることができる。外部の圧力で「ロゴスの場としての大学」が危機に晒されていることに加え、大学の内部にいるものたちが、そうした圧力に抵抗し「ロゴスの場としての大学」の意義をかたるための「ロゴス」を持ち合わせていない。大学におけるロゴスの喪失は、二重に捉えることができるのである。

三木は、こうした状況、すなわちロゴスの二重の喪失の危機にあつて、滝川事件においてはその「危険思想」を、ナチスの焚書事件においては「ドイツ的／非ドイツ的」という枠組みを、冷静に、論理的に分析し、その概念のあいまいさを指摘する形で批判を加えた。こうした批判を三木が行ったこと、三木の批判それ自体が、情動的、感情的に流れていく国家に対して「冷静」や「論理」を実践する試みであつた、とみることができる。

四、おわりに

以上のように、三木は「研究の自由」を擁護することを国家に対する大学の役割として重視していた。とりわけアカデミズムの伝統が浅く、古典や理論が軽視される日本の大学において、理論を理論として有する意義を見出し、「ロゴスの場としての大学」の在り方を追求することは、三木自身の思索の足場を保つと言う意味において実存的にも重要な課題であつたと考えられる。三木の大学論は、自らが「ロゴス」を実践することでその足場を保とうとする試みであつたと言えよう。

三木が教授会やハイデガーに向けた批判は、「大学改革」の名のもとで翻弄され、外部からの圧力に対して抵抗できずにいる現代の大学人に向けられたものとしても受け取ることができる。また、三木の実践は、そうした状況のなかで大学人が、いかに自らの足場を守っていくのか、その課題を引き受けるうえで一つの手がかりになっていると言えよう。

三木研究に関していえば、三木が、大正期の教養が非政治的であつたことを指摘したうえで提唱した「政治的教養」について、彼の大学論を踏まえたくて新たに考察することができると考えられる。今後の課題としたい。

- (1) 代表的なものに以下の文献が挙げられる。渡辺かよ子(一九九七)『近現代日本の教養論 ―一九三〇年代を中心に』行路社。
筒井清忠(一九九五)『日本型「教養」の運命 ―歴史社会的考察』岩波書店。
- (2) 大澤聡(二〇一七)「解説 日記と焦り」『三木清大学論集』講談社、二九六頁。
- (3) ここでもまとめている三木の大学論は、以下の論考をもとにしている。三木清(一九三八)「大學の權威」『三木清全集第十四卷』岩波書店、一九六七年、四〇―五七頁、および、三木清(一九三八)「理論と国策 ―大学自治制度について―」『三木清全集第十五卷』岩波書店、一九六七年、二七九―二九二頁。
- (4) 竹内洋(二〇〇三)『教養主義の没落 ―変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社、四〇頁。
- (5) 三木清(一九四一)「読書遍歴」『読書と人生』講談社、二〇一三年、三三三頁。
- (6) 筒井(一九九五)、前掲書、九三頁。
- (7) 三木清(一九三七)「教養論」『三木清全集第十三卷』岩波書店、一九六七年、三一〇―三二五頁。
- (8) 三木(一九四一)、前掲書、三三三頁。
- (9) 森一郎(二〇一八)「労働と言う基礎経験」『現代思想』増刊号、二九八頁。
- (10) 大峯顕は、三木のパスカル論が「ハイデッガーによって訓練された解釈学的存在論という新型の武器をもって華々しく肉薄している」と指摘し、この論が「ハイデッガーの解釈学的存在論の強い影響の下に生まれた書である」と言う。大峯顕(一九九九)「解説」三木清『京都哲学撰書第二卷 パスカル・親鸞』燈影舎、二八九頁。
- (11) 三木清(一九三七)「大學とアカデミズム」『三木清全集第十三卷』岩波書店、一九六七年、三五九―三六一頁。『三木清全集』からの引用本文については読みやすさを優先して、常用漢字、現代仮名遣いにあらためた。
- (12) 三木清(一九三三a)「パトスについて」『三木清全集第一九卷』岩波書店、一九六八年、五八〇―五八四頁。
- (13) 大峯顕(二〇〇八)「創造する構想力」解説」三木清『京都哲学撰書第十八卷 創造する構想力』燈影舎、四一四頁。
- (14) 滝川事件の詳細は、以下の文献を参照。松尾尊兌(二〇〇五)『滝川事件』岩波書店。なお当時の史料としては以下の文献を参照。佐々木惣一ほか共編(一九三三)『京大事件』岩波書店。
- (15) 三木清(一九三三b)「京大事件の再吟味」『三木清全集第一九卷』岩波書店、一九六八年、六〇四―六一頁。

- (16) なお、当事者である京大法学部もまた、京大他学部や他大学などの外部に支援を依頼せず、あくまで自発的な協同を待つという姿勢だったことも指摘されている。松尾（二〇〇五）、前掲書、一九〇—一九七頁。
- (17) 焚書事件に関わるナチスと大学の関係については、以下を参照。山本尤（一九八五）『ナチズムと大学——国家権力と学問の自由』中央公論社。
- (18) 三木清（一九三三c）「ナチスの文化弾圧」『三木清全集第一九卷』岩波書店、一九六八年、五九四—六〇二頁。
- (19) 同上書、六〇二頁。
- (20) 松尾（二〇〇五）、前掲書、二二五頁。ほかにも、焚書事件から学芸自由同盟結成に至る詳細は、以下の文献も参照。渡邊一民（一九七六）『近代日本の知識人』筑摩書房、一三二—一四二頁。
- (21) 三木清（一九三三c）、前掲書、五九六頁。
- (22) 三木清（一九三三d）「ハイデッガーと哲学の運命」『三木清全集第十卷』岩波書店、一九六七年、三一〇—三二〇頁。
- (23) 宮川透は、三木の「ハイデッガーと哲学の運命」を取り上げ、それが単にドイツのナチズムへの批判のみならず、日本のファシズム批判でもあったと指摘している。宮川透（一九七〇）『三木清』東京大学出版会、九九頁。
- (24) マルティン・ハイデガー（一九三三）「ドイツ的大学の自己主張」マルティン・ハイデガーほか（一九九九）『30年代の危機と哲学』清水多吉・手川誠士郎編訳、平凡社、一〇二—一二六頁。
- (25) 大学論における批判としては、たとえば以下の文献が挙げられる。アラン・ブルーム（一九八八）『アメリカン・マインドの終焉』菅野盾樹訳、みすず書房。ハイデガー論におけるもっとも痛烈な批判を行ったとして議論のきつかけになった文献としては以下が挙げられる。ヴィクトル・フリアス（一九九〇）『ハイデガーとナチズム』山本尤訳、名古屋大学出版会。
- (26) 前注に加え、ハイデガーとナチズムとの関わりについての議論については、他に以下の文献が挙げられる。ラクーーラバルト（一九九二）『政治という虚構』浅利誠・大谷尚文訳、藤原書店。また、三木研究の文脈で、ハイデガーをめぐる論について言及したものとして以下の文献が挙げられる。町口哲生（二〇〇四）『帝国の形而上学——三木清の歴史哲学』作品社。
- (27) 「学長就任演説」以前に三木がハイデガーの思想について考察したものとして、以下が挙げられる。三木清（一九三三e）「パトリオギー」『三木清全集第一九卷』岩波書店、一九六八年、五八五—五八八頁。ここで三木は「ハイデガーの現象学はパトスの固有性を認めようとしたが、これとても一面的にパトスの意識の現象学である」と、その思想がパトスに傾斜している問題を指摘している。

Practice of Logos for the University as “A Place of Logos”: A study of Kiyoshi Miki’s idea of the University

FUJIMOTO Yui

Abstract Kiyoshi Miki (1897–1945) is one of the famous philosophers of the Kyoto School. Although his philosophy has been studied a lot, his idea of the university has not been focused on as a main topic for study. The purpose of this paper is two-fold: to examine Miki’s arguments regarding the university with his philosophical thoughts, and to consider the potentiality of Miki’s idea of the university today. In conclusion, it will be shown that his idea of the university is based on his philosophical theme which is related to the dialectic of Logos and Pathos, and that his criticism of the university represents a practice to protect the university as “A Place of Logos”.

Key words: university, Kiyoshi Miki, Logos